

真田幸村雌伏の地(九度山)

絵と文・熱田親憲 題字・熱田秦華

熊野古道

みちのく

36

九度山は高野山の印象しかない町だった。「登山道入口」というが、大河ドラマ「真田



真田庵(九度山町九度山)にて

丸で真田信繁(幸村)雌伏の地だったことを知り、あの武将がどんな幽閉生活を送ったのだろうかに興味を湧き、南海高野線に乗った。九度山駅は高野山系の中腹にあり、前方

に紀の川がゆっくりと流れ、その支流の丹生川が足元まで流れ込む。九度山町中心部は二つの川に挟まれた丘陵地で、特産の干し柿に使う柿の畑が随所に見られた。

九度山の地名の由来は、高野山の開祖・空海が月に九度、山麓にあるこの地に住む母親を訪ねたことからだという。旧道沿いの「真田のまち」は、どの家の玄

関も、九度山と書かれた織や色紙で折られた兜、提灯が軒先をにぎわしていた。まもなく、幸村が父と離れて草庵を結んだといわれる松山宅に着く。住宅の裏に白壁の土蔵があり、ここから幸村が住むための賃貸契約書が出てきたと話してくれたのは、ご主人の松山さん。庭の草むし

質素ながらも充実生活

うね」といいながら分けていた。幸村が父・昌幸と一緒に住まなかったのも智将らしく、今日、会社幹部が出張する場合でも、同時に同じ交通機関は使用しないよう心掛けているのと似ている。二つ目の抜け穴伝説のある「真田古墳」を左にみて、200坪ほ

りの手を休めて話が続いた。土蔵前の垣根近くに、幸村が大坂へ出陣する際の抜け穴だったという伝説がある。「雷封じの井戸」がある。庭先には丹生川が流れる。幸村が戦いの準備のため、謹慎の身ながら馬と共に武術の稽古に励んでいたという。庭に咲く赤い梅の木元にフキノトウがたくさん自生しているのを見つけた。「幸村も食べていたでしょ。安上人の思いからである。子供時代、絵

この地で幸村は、生涯一番長い14年間を新芽立つ 秦華